

大阪大学図書館報

Vol. 23 No. 5/6 Mar. 1990(平成2年)通巻99号

目次

- | | |
|----------------------------------|-----------|
| ○図書館と法学部 | ○教官著作寄贈図書 |
| ○ヒューム・コレクションについて | ○会 議 |
| ○研究室等の端末による検索サービスの利用状況について | ○日 程 |
| ○日本医学図書館協会「研修会：学術情報システムと医学図書館」報告 | ○人 事 |

図書館と法学部

田 中 茂 樹

総合大学において附属図書館を最も頻繁に利用しているのは、おそらく法学部の学生ではないかと思われる。本学の附属図書館の貸出統計によると、1988年度の年間の短期（2週間）貸出冊数13,236冊のうち、自然科学系は428冊で、歴史や哲学もほぼ近い数字であるのに対して、法学部や政治学などの社会科学系は77パーセント強の10,205冊だという（茂幾掛長調べによる）。この数字だけでも、法学部の学生の勉学にとっては附属図書館がいかに大きな比重を占めているかを語りうるであろう。私の学生時代にも、法学部の模範的な学生は、毎朝できるだけ早起きをして、まず附属図書館の大閲覧室の好みの席に荷物を置き、次に民法や刑法などの注釈書や体系書や判例集を数冊借り出し、夜の8時まで教科書や講義ノートと読み比べながら、必死でサブノートを作成していた。もとより講義や演習にもできるだけ出席するが、図書館でこのような予復習を怠ると、授業中に六法全書の該当条文を瞬時に探り当てることすらできず、ましてやノート筆記などできなかったからである。

外国でも事情は似ている。米国のLaw Schoolの学生の24時間は、映画の「ペーパー・チェイス」などですすでにお馴染みであるが、最近では米国の弁護士資格をもつソニー法務部の阿川尚之氏が「アメリカン・ロイヤーの誕生、ジョージタウン・ロースクール留学記」（中公新書）で、図書館が留学生活の中軸であった状況を次のように描写している。「毎朝7時に起きる。ケースブックをバックパックに何冊も詰めて、メトロと呼ばれるワシントンの市営バスに乗って学校に向う。授業を受け、その前後には図書館で予習復習に精を出す。いったん夕食を採りに家に帰り、その後は家で勉強するか、余力があれば再び図書館へ出かける」と。

しかしながら附属図書館で学部学生が利用しうるのは、その大学の図書資料のごく一部にすぎない。本学の場合、法学部の蔵書の5分の1は附属図書館に備え付け、残りの5分の4は法学部の資料室と各講座の研究室に収納している。だからゼミ報告で教官や他のゼミ生から注目されたい法学部の学生は、附属図書館だけに頼りきらずに、法学部の一階と二階の資料室を利用して、大学紀要などで法律論文を読み比べ、できれば外国の法令や判例をも覗くことが望ましい。そのときはじめて俺は大学へ入ったのだなと実感するであろうし、そのための予備訓練は文献講読や外書講読で厳しく鍛えられているはずだ。

私自身の場合、外国新刊図書資料室や内外の貴重図書を収納した学部図書館の地下の書庫に入室を認められたのは、大学院に進学してからであった。その際ある先輩は「修士論文を書くには、とにかく毎日一回は書庫に通って、日本人がまだ誰も読んでいない原書を借り出せ」と指導した。私の当時の専門は西洋法思想史であったが、地下の薄暗く黴臭い書庫には、新カント派の代表者であるシュタムラーの法哲学の体系書などは著者が版を改めるごとに購入してあったし、どの図書を開いても、悔しいことにすでに誰かの傍線や書込がある。これでは容易に修士論文の恰好の素材が見つかりそうにない。思いあぐねて一年後に例の先輩に相談したところ、笑って曰く。「それに気づけばよいのだ。実はこれらの書込や傍線は先達が俺たち後進のために残してくれたのだ。だから有難く活用したまえ」と。アルバイトに追われ、就職のあてもないこの大学院生の時代は最も苦しく、惑いも大きかったが、いま考えると研究者としては最も充実していた。

教官として最初に赴任したのは南国の地方国立大学であり、しかも私が初めての法律学担当者であったから、その大学の附属図書館の定期購入の法律雑誌は「法律時報」だけであった。従ってこの時期には専らヘーゲルの「法の哲学」などの古典を繰返し読み、春秋の学会出張の機会に他大学の図書館で文献資料を複写させていただいた。とはいえ当時はまだ複写機も普及しておらず、一般に他大学の図書資料を借用するにはかなりの屈辱を経験しなければならない。戦後に新設された本学の法文経の学部の教官も、初期には類似の苦労を嘗めたという。以上は法学図書の利用者としての大学図書館との付き合いの一端である。

六年前に本学に赴任してからは、図書資料の不足という悩みからは一応は解放された。ところが間もなく図書館委員および法学部資料室運営委員長に選出された。こうして図書館と別な形態でも付き合うことになったのであるが、同時にかつて予想もしなかった種類の難問に直面している。それは本学の法学部の蔵書の附属図書館への収納ないしは「返却」が事実上不可能となってきたという深刻な問題である。一方で法学部の資料室や研究室では図書資料が「溢れ」はじめており、貧弱な建物はその重量に耐えかねている。他方で附属図書館の書庫は「返却」図書の収納の限度に達している。もとより概算要求で増改築を計画しているものの、その実現は中之島から吹田への学舎移転の完了後になるとのことである。

素朴な疑問だが、隣接の神戸や京都の国立大学と比較しても、なぜ本学では附属図書館と法文経の学部の建物や施設が貧弱で狭いのか、理解に苦しむ。この問題の妥当で早急な解決については、全学的視野にたつ熊谷総長と附属図書館の新しい越田館長の御活躍に期待しているが、私の立場から最後に補足させていただきたいのは、第一に、本学法学部の蔵書数は戦後新設の法学部としては抜群の冊数ではあるが、決して充分ではない、ということである。他大学の法学部の蔵書数を調べてみると、京都大学は約50万冊、東京大学は約41万冊（他に東京大学付設の外国法文献センターに約5万冊）、神戸大学法学部は約35万冊である。ちなみに世界の法律図書館の模範とされるハーヴァードのロー・スクールの蔵書は140万冊を越えている（法学部門講師調べによる）。

第二に、法学部でも、自然科学系の諸学部や経済学部などと同様に、海外とのコンピュー

タ通信や内外のデータベースを利用することによって、図書ないしは活字資料の収納スペースの問題をも解決しようと努力している。この点で本学の法学部の情報室は、全国の法学部でも先進的である。しかしながら、日本の裁判所や議会や法務省は、判例や法令や法律書誌のデータベース化については、欧米諸国に著しくたちおけているという事情があるから、これは現時点では根本的な解決策ではない。

第三に、本学における図書館や法文経の建物施設をめぐる問題の背後には、国際化時代の大阪で、自然科学系の研究教育施設と人文社会科学系の教育研究施設とを両立させながら、いかにして両者の有機的結合をめざすかという問題が控えているのではないだろうか。大阪大学の母体は適塾と懐徳堂であり、そこからは近代日本の自然科学者のみならず、指導的な社会学者や思想家が巣立った。近世の大阪は、商都でもあり、市民文芸の地でもあったが、同時に明治以降は高等裁判所の所在地でもあり、弁護士の数も東京に次ぐなど、関西では京都や神戸に劣らず人文社会諸科学の拠点となる有利な条件と伝統を備えている。

ところで西洋の最古の大学は北イタリアのボローニャ大学である。1988年にこの大学はその創立900年を迎えた。その祝賀行事には熊谷総長も招待されたようであるが、その直前に私は幸運にもこの祝賀行事の一環としてのボローニャの法社会学国際学会で日本の全体主義について報告する機会を与えられた。いま「幸運にも」と表現したが、これは空虚な形容句ではない。法律学を学ぶ者にとっては、ボローニャはメッカである。1100年前後に、イタリアの大阪ともいふべき商都ボローニャの学芸教師であったイルネリウスIrneriusが「ローマ法大全」(Corpus juris civilis)の注釈を講義したのが、西洋の大学における職業的な法律学の専門教育の最初であるとされている。間もなくヨーロッパ各地から法解釈を学ぶ若者が殺到し、十二世紀後半にその学生総数は1万に達した。たとえていえば、イルネリウスは旧制大阪高校の哲学教師という感じである。ところが近代のボローニャ大学は、法と哲文のほか、医や理や薬などの自然科学諸分野でも名門となり、無線通信の発明者のマルコーニも、この国際的商都で生れた。こういう学問的調和のあるボローニャ型の大学を大阪は育ててほしい。

(たなか しげき 法学部教授)

ヒューム・コレクションについて

塚 崎 智

このたび関係者各位のご尽力により、文部省大型コレクション収書計画の一環としてデイヴィッド・ヒューム(1711-76)の著作ならびにヒューム関係の研究書その他113点176冊が本館に所蔵されることとなった。このエディンバラ生れの哲学者の主要著作は今日でも熱心に読みつがれていて、現代哲学に大きな影響を与えつづけている。しかもヒュームを研究する人は哲学畑の学者に限られることなく、広く歴史や法学や経済学などの社会科学系の人々にも及んでいる。先頃日本イギリス哲学会監修のもとに刊行された論文集『デイヴィッド・ヒューム研究』(御茶の水書房、1987年)の目次を見ると、言語論、因果論、道徳論、宗教論、正義論、歴史論を扱ったもののほかに、ヒュームとジャコバイト・イデオロギー、イギリスの政治党派の考察などの論文が並んでいて、ヒュームがいかに多方面の研究者によって研究されているかがわかる。

そのようなヒューム研究者層の厚さにもかかわらず、また要望の強さにもかかわらず、ヒュームの全集ということになると、十九世紀の七十年代にT. H. GreenとT. H. Groseの

両名によって編集された四巻本の著作集があるだけで、いわゆる「全集」なるものは存在しない。全集刊行の計画を伝聞として幾度か耳にしたが、まだ実現の運びに至っていないというのが実情である。したがって今回の収書はその点で私たちの渴をいくぶんか癒してくれる筈である。

収書目録をみて目につくことの一つは、アーネスト・モスナーの蔵書の一部57点が収められていることである。モスナー博士はヒューム伝記の決定版とも言うべき浩瀚な著作The Life of David Hume (Oxford, 1954, 2nd ed. 1980) の著者として、また雑誌Journal of the History of Ideasにヒューム関係の論文を多く寄稿した研究者として知られる人であるが、私たちはモスナー博士の蔵書にふれることによって、彼の仕事場の一端をうかがい知ることができよう。

つぎに特記すべきことは、チェインバーズ (Ephraim Chambers, ?-1740) の『百科事典』(Cyclopaedia or an Universal Dictionary of Arts and Sciences, 2vols, London, 1728) についてである。十八世紀の百科事典といえば、フランス啓蒙期の記念碑的労作『百科全書』(本巻17巻、1751-65; 図版11巻、1762-72) と今日もなお改訂を重ねて生命を保っている『エンサイクロペディア・ブリタニカ』(3巻、1768-71) を双璧としなければならないであろうが、この二つの事典の源流をなすのが他ならぬこのチェインバーズの『百科事典』なのである。この英国で成功した事典をフランス語に翻訳しようとする企画のなかからディドロ・ダランベールの『百科全書』が生成発展したのであったし、その連鎖反応がスコットランドに及んで『エンサイクロペディア・ブリタニカ』の誕生を促したという歴史的事実がある。また永嶋大典氏(前本学教授)によれば、世界の辞書史上有名なジョンソン博士の『英語辞典』(1755) もチェインバーズに負うところ多く、ジョンソンの蔵書目録のなかにはチェインバーズ『百科事典』(第4版、1741年) が含まれているとのことである。

それはそうとしても、百科事典がヒューム研究とどのような関わりがあるのかと奇異に感じられる向きもあろう。事典であるからには狭義のヒューム研究書とはもとより言えないであろう。ただ一般に歴史の研究において過去の辞典・事典類が、それぞれの時代の通念・通説を理解するうえで有効な手がかりを与えてくれることは間違いない。はたしてヒューム関係の論文や研究書においても、ジョンソン博士の辞典等への参照はしばしば見かけられるところである。私自身、五、六年前にJ. P. Wright, *The Sceptical Realism of David Hume* (1983) を読んだ時に、著者がチェインバーズの『事典』をa standard scientific reference book of the dayとしたうえで、同事典中の‘Impressions’, ‘Imagination’, ‘Reasoning’, ‘Mathematics’などの項目を参照しているのを見て大いに興味をそそられ、チェインバーズの事典を何とか手にしたいとねがっていたのである。四年前にある古書展示会場で私がたまたま見出した同事典を書店のご厚意により今回のコレクションに加えていただいたことは有難いことである。同コレクション中、フォリオ判、全二巻の同事典が、ヒュームの主著『人間本性論』(A Treatise of Human Nature) 初版、全三巻と並んでひととき異彩を放っているように見えるのは自己満足の眼鏡越しだからであろうか。

(つかざき さとし 文学部教授)

研究室等の端末による検索サービスの利用状況について

学内の研究室や図書室にあるパソコンなどの端末から、電話回線をとおして本学の図書雑誌の所在情報を検索するサービスは、昨年(1989年)の1月に運用を開始して以来1年余りが経過しました。その利用状況についてご紹介します。

現在利用申請をしている方は45名で(平成元年度分)、これまでの総利用件数は447件となっています。月別の利用申請者数、利用者数、利用件数は下表のとおりです。

〈利用申請者数・利用者数・利用件数〉

年 月	利用申請者数	利用者数	利用件数	年 月	利用申請者数	利用者数	利用件数
1989年 1月	0	0	0	8月	1	5	25
2月	2	0	0	9月	0	4	76
3月	21	4	20	10月	2	6	37
4月	21	5	19	11月	1	4	27
5月	4	10	71	12月	1	7	34
6月	2	7	28	1990年 1月	2	5	40
7月	3	4	19	2月	0	6	51

この検索サービスを利用できるのは本学の教官と職員で、利用申請により登録していただく必要があります。申込用紙は最寄りの図書館・図書室のカウンターにありますのでご利用下さい。

また、来年度も引き続き利用される方の更新申請の受付を現在行っています。継続利用される方は更新の手続きをして下さい。なお、利用方法などの詳細は図書館情報管理課システム管理掛(豊中地区 内線2330)へお問い合わせ下さい。

日本医学図書館協会「研修会：学術情報システムと医学図書館」報告

平成2年1月25日～26日、日本医学図書館協会主催で標題の研修会が、日本生命中之島研修所(大阪市北区)で開催された。

日本医学図書館協会(以下、「医図協」と記す)とは、国公私立大学を中心とする全国100あまりの医学図書館が加盟する国内有数の主題別図書館協会である。医図協は、昭和2年の創設当初より、特に、図書館間協力活動(相互利用・相互貸借・分担収集等)を協会事業の中心とし、『医科大学共同学術雑誌目録』(昭和6年)『医科大学総合洋書目録』(昭和24年)『受入予定雑誌目録』(昭和32年)等、我が国では先駆的な総合目録の刊行・改訂を軸として、医学資料の所在情報を常に提供し、図書館ネットワーク活動を展開してきた。これらの活動は活発に受け継がれており、現在も、大学図書館間協力活動の指標となる図書館間文献複写活動(Inter Library Loan=ILL)は、医学分野の図書館の割合が約4割を占めている。しかし、医図協を中心とするこれまでの医学図書館の協力活動は、いわば、「学術情報システム」を手作りで、コンピュータ・ネットワークを用いずに、医学図書館間の資料所在情報

システムを構築してきたといってもよい。

一方、「学術情報システム」は、昭和55年の学術審議会答申を基本として、文部省が国の施策として推進しているビッグプロジェクトである。昭和61年度設立の学術情報センターを中心として、ここ数年、急速に具体的な進展を見せている。平成元年3月現在、全国を縦断する「学術情報ネットワーク」の第1期計画が完成、「目録所在情報システム」においては、全国124大学の図書館との接続が完了、既に図書270万冊以上・雑誌190万件以上のデータが入力され巨大なデータベースに成長しつつある等々、めざましい発展をとげている。

今回の研修会「学術情報システムと医学図書館」は、このような状況のもとで、医図協として、初めて学術情報システムをメインテーマとした研修会であり、特に、設立母体の異なる加盟図書館が、学術情報システムの現状やネットワークの拡がりについて共通認識を持つことを重視し、さらに今後、医図協として学術情報システムにどのような貢献ができるかを討議することを目的とした。

研修会では、学術情報センターの小西講師（事業部目録情報課図書目録情報係長）の「学術情報システムの概要」、本学の故選講師（情報管理課図書館専門員）の「ILLシステムについて」の講義を始め、加盟図書館からの接続事例報告・学術情報センターのサブシステムごとの利用事例報告、電算機メーカー各社講師による接続システムの紹介など多岐にわたる発表が行われ、最後に参加者を含めたパネルディスカッションが行われた。中之島分館は、本研修会の世話館として企画・調整・運営に携わったが、準備期間等が不十分であったにもかかわらず、全国から63名の参加者を得、講師・事例報告者・運営関係者・オブザーバー参加を含めて100名の規模となり、熱心な質疑が行われた。

教官著作寄贈図書

一本館一

麻生 誠（人科・教授）

生涯教育論 改訂版

（放送大学教育振興会 1989）

加賀山 茂（法・助教授）

法律家のためのコンピュータ利用法

（有斐閣 1990）

小森田 精子（教・講師）

インド錬金術

佐藤任、小森田精子訳著

（東方出版 1989）

大高 順雄（言文・教授）

中世の大学

J.ヴェルジェ著、大高順雄訳

（みすず書房 1989）

三宅 裕（工・教授）

Boundary integral methods in fluid engineering.

三宅 裕（議長）

山口 修（文・助教授）

岩波講座 日本の音楽・アジアの音楽 別巻Ⅱ

山口 修〔ほか〕執筆

（岩波書店 1989）

吉田 敬義（健体・助教授）

運動負荷テストとその評価法

K.Wasserman〔ほか〕著

谷口興一・吉田敬義共訳

（南江堂 1989）

David Roberts（言文・講師）

Colonel Jack.

（OXFORD. U. P. 1989）

福島 吉彦 (教・教授)

漢書 (中国詩文選 8)

(筑摩書房 昭和51年)

漢の武帝 (中国の英傑 3)

(集英社 昭和62年)

史記世家 上, 中

司馬遷著、小川環樹、今鷹真、福島吉彦 訳

(岩波 1980, 1982)

史記列伝 1 - 5

司馬遷著、小川環樹、今鷹真、福島吉彦 訳

(岩波 1975)

水谷 幸夫 (工・教授)

燃焼工学 第2版

(森北出版 1989)

斉藤 慎 (教・助教授)

政府行動の経済分析

(創文社 1989)

—基礎工学部図書分室—

難波 進 (基・教授)

Ion beam modification of materials.

難波 進 他編

(North-Holland 1989)

三井 利夫 (基・教授)

Landolt-Börnstein : Zahlenwerte
und Funktionen aus Naturwissensch-
haften und Technik, Neue Serie,
Grup. 3, Bd. 28, Teilbd. a.

Herausgeb. T. Mitsui & E. Naka-
mura.

(Springer-Verlag, 1990)

—薬学部分館—

富田 研一 (薬・教授)

核酸・蛋白質の構造情報

内田久雄編、富田研一 他著

(東京大学出版会 1989)

■■■■ 会 議 ■■■■

図書館委員会

平成元年. 12. 18. (月) 13:00~15:00 (本館 会議室)

報告事項: 1. 差別落書事件について。委員長から、12月11日本館において差別落書が発見され、その経緯と対応について報告があった。2. 大型コレクションについて。情報管理課長から、かねて文部省に提出していた大型コレクションが、このほど認められた旨報告があった。

協議事項: 1. 次期附属図書館長候補者の選考について。館長選考実施の要領について説明が行なわれたのに続いて、館長候補者一名を選出するための選挙が行なわれた。その結果、教養部教授 越田 豊氏が選出され、次期図書館長候補者として総長に推薦する旨提案され承認された。

豊中地区運営委員会

平成元年. 12. 18. (月) 15:00~16:20 (本館 会議室)

報告事項: 1. 本館の増改築について。情報管理課長から、本館の増改築の計画についてのこれまでの経緯の説明を行った後、委員長から各学部の図書収蔵の問題に関する実情報告を求められ、種々意見交換があった。2. OPACの進捗状況について。情報サービス課

長から資料に基づき説明を行い、OPACおよび学内の情報ネットについて、種々意見交換が行なわれた。3. 大型コレクションについて。情報管理課長から本年度の大型コレクションについて [デイヴィッド・ヒューム] 全113点が認められた旨報告があった。

■■■■■ 日 程 ■■■■■

- 元. 12. 7. 図書館建築基準に関する特別委員会 (W・G) (神戸大学)
 元. 12. 8. 平成元年度主題別研究集会 (基礎工学部国際棟)
 元. 12. 18. 図書館委員会 (本館会議室)
 元. 12. 18. 豊中地区運営委員会 (本館会議室)
 元. 12. 21. 図書館建築基準に関する特別委員会 (W・G) (神戸大学)
 2. 1. 25/26 研修会「学術情報システムと医学図書館」 (日本生命中之島研修所)
 2. 2. 6. 平成元年度第3回総合目録小委員会 (学術情報センター)
 科研費(試験研究)打合せ会 (東京大学)
 2. 2. 7. 国際連絡委員会 (東京大学)
 学術情報システム特別委員会 (東京大学)
 2. 2. 28. 中之島分館図書選定小委員会(平成元年度第2回) (中之島分館)
 2. 3. 5. 図書館建築基準に関する特別委員会 (文部省)
 2. 3. 9. 外国雑誌センター館会議 (東京工業大学)
 2. 3. 15. 平成元年度第4回総合目録小委員会 (学術情報センター)
 図書館建築基準に関する特別委員会 (W・G) (京都大学)

人事異動

異動前の所属・職名	氏名	異動内容	発令年月日
	沼田世志子	(採用) 情報サービス課資料運用掛事務補佐員	2. 2. 1
情報サービス課資料運用掛事務補佐員	多田佳代子	(退職)	2. 1. 31
" " "	木下 昌也		2. 2. 28
吹田分館 " "	山下 育男		"
" " "	堀 英樹		"
" " "	藤木 武博		"
" " "	伊藤 知洋		"
" " "	油川 達昭		"